



新小岩幼稚園・未就園児クラス

アドバイザー 猪之鼻晴子

## 『 言葉のボール 』

4番目次男は小さな時からおしゃべりで「ちょっと、黙っていてくれる？」と家族に言われるくらいだった。今は中学生になりずいぶんと口数が少なくなつたが、まだ学校でのことや友人とのことも話してくれる。まず、それが本当のことかどうかは疑わしいと思っている。かなり大げさに、自分に都合よく加工して話しているだろう。先生やお友達から話を聞くと、かなり違う話だったという経験が多いので、「これもどうかな？」と思って聞いてしまうことがある。

私にはウソは絶対に付いてはいけない。と言うだけの強さがない。

誰だって自分をかっこよく見せたいし、都合の悪いことは隠したい。

だから、たまに「あれウソついた？」と訊いてギクツとさせる。

「ほとんど、ママはウソはわかっているけれどね」と言うと「本当は・・・」

と話し出したりする。何もかも話しをしないよりも、言葉をよりたくさんくれる方が

その子のことがよく理解できる。6人と暮らしていても、大きくなるとそんなにたくさんの

言葉のボールが家の中を飛び交うわけではないけれど、私に飛んで来たボールは

全部投げ返す。その時に白いボールが来たら、白いボールを返すようにしている。

「ああ、つかれた」には「つかれるよね」「もう、あのコーチ怖いからイヤだ」には

「ほんと、怖いよね。よく我慢してるね。ママなら無理。」

まずは同じボールを共有してみる。つつい子どもに意見しないと考えていると

くれたボールを捨てて、赤いボールや黒いボールを投げてしまう。または、

まったく違う大きなボールを投げつけてしまって、キャッチボールが終了することもある。

ひとは意見やお説教はわかっているけれど、返してほしいのは「本当だよ」のひとこと

なのだと思う。ウソも大げさも弱音も、気持ちを許したひとにしか投げられない。

まずは、そのまま受け取ってみたい。

(小6) 「寒いし、あのコーチこわいから行きたくないな。」

「ほんと、寒いね。あのコーチ怖いよ。大人だって怖いもん。」

(小6) 「いつもいつもオレばかり怒られるんだよ。」(本当は違うらしい)

「そうなんだ、なんでだろうね。いやだね。」

(小6) 「でも、〇〇も一緒に怒られるんだよ。」

「〇〇くんもかわいそうなんだ。」

(小6) 「俺行かないと、〇〇ひとりで怒られるな。」

「それも気の毒か」

(小6) 「手袋持って行かないと。またうるさいから。」

「寒いからね。」

ただ白いボールを投げたかっただけで、私には大した意見は求めていないらしい。ものすごい剛速球は返せないけれど、期待されていないとわかって、ただ、日々のキャッチボールを楽しんでいる。